



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人材育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、20カ国 60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころからだの飢餓」に応える活動をしています。

飢餓対策ニュース 第315号 発行日 2016年9月20日 (毎月20日発行) 定価 15円

1 分間に17人 (内12人が子ども)
1日に2万5,000人
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています。



一般財団法人

日本国際飢餓対策機構

2016 10 No.315

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる



「世界でいちばん遠い距離」

日本国際飢餓対策機構 特命大使 近藤高史

「冷蔵庫の食べ物をよく見たら賞味期限切れで、もったいないと思ったけど捨てちゃった…」そんな経験は誰にでもあるはずです。日本の食べ残しは年間1700万トンにのぼる一方、世界の飢餓地域に届けられる食料支援はすべて合わせても年間400万トンほどです。(農林水産省・食品ロス資料2013) 単純計算なら、日本人の食べ残しをすべて支援に回せば、今日にでも全世界の飢えている人々をすべて救うことができるのです!問題はなぜそれができないかです。

私はよく小学校で世界の飢餓について話す機会がありますが、その時必ず「世界でいちばん遠い距離を克服して下さい」と話します。小学生には少し難しい言葉かもしれませんが、皆、きょとんとしています。「世界でいちばん遠い距離…?北極から南極かな、アフリカの方が遠いかな、世界一周、いや宇宙のことかな…?」そんな質問が生徒たちの頭をぐるぐる回っているのが見えるようです。

実は「世界でいちばん遠い距離」とは、私やあなたの頭から手の先までのわずか1m足らずの距離のことです。なぜそれが世界でいちばん遠い距離かというと答は簡単です。私たちは往々にして、頭で聞いて「それはいい話だ!」

と思ってもすぐ忘れてしまいます。また仮にその話をよく聞いて、心に忘れなかったとしても、何のアクション (手) も起こさなければどうでしょうか。結果は何も変わりません。「世界でいちばん遠い距離」の克服…それは聞いたことを心に受け止め、行動に移すことを指しているのです。

アフリカのコンゴにある小さな町ブエトに住むパメラさん (写真④) は、この「世界でいちばん遠い距離」の話を3年前、コンゴで初めて行われたVOC (地域変革ビジョン) セミナーで聞きました。そして彼は実行したのです。

国内紛争で別れ別れになった家族を捜し出し、仲間たちを説得し故郷に近いブエトで共同農場を始めました。そんな夢のような話を最初は誰も信じなかったのですが、今やトウモロコシをはじめ様々な野菜が収穫され、養豚事業も始まりました。パメラさんの小さな決心が、家族、仲間たち、地域社会に至るまで大きな影響を与えたのです。

さて、毎年10月16日は国連が定めた「世界食料デー」です。世界の飢餓を止めるため、あなたにできる「世界でいちばん遠い距離」の克服は何でしょう?

チョコレートのようなコクのあるココアと大人気のカブレンドコーヒーのセット

- トラディショナルホットチョコレート(ココア) 200g / 税込 740円 (フェアトレード商品)
- モカブレンドコーヒー 200g / 税込 930円 (ハンガー・ゼロ支援商品) 以上を合計 2,470円 (送料 800円含む)



【お得情報】国際協力カレンダー 1,080円と一緒にご注文なら計 3,550円のところを送料込 3,300円とお得になります。是非ご利用ください。(国内の指定1箇所へまとめてお届け) 収益の一部はハンガー・ゼロ活動の支援金になります。

★国際協力カレンダー「地球家族」2017年版お申し込み受付中!



【問合せ】キングダムビジネス

〒540-0026 大阪市中央区内本町1-4-12NPOビル402
TEL :06-6755-4877 FAX :06-6755-4888
メール: customer@kbwin-win.org
Web: キングダムビジネスで検索。

「チャイルドサポーター」

支援中の子どもたちへクリスマスカードを送りませんか?



送付ご希望の方は、11月11日(金)までに大阪事務所へ届くようご協力ください。(期日以降もお預かりしますが、子どもたちへの到着が遅くなる可能性がある点ご了承ください。) なお、プレゼントなど物品の同封はご遠慮ください。
※サポーターの皆様からクリスマスカードを大阪事務所でご受領した旨のお知らせが必要な場合は、封筒などに一言お書き添えくださる用をお願いします。

2016世界食料デー大会にご来会を
～各地の大会日程や募金はホームページから～

あなたの1食分で募金協力を

募金は、主に以下のプロジェクトに用いさせていただきます

- バングラデシュ: 子ども教育&コミュニティ開発支援
- ボリビア: 子ども教育&コミュニティ開発支援
- コンゴ民主共和国: 農業&コミュニティ開発支援
- フィリピン: 子ども教育&コミュニティ開発支援
- ルワンダ: 子ども教育支援
- ケニア: 子ども教育&コミュニティ開発支援
- その他



募金はウェブサイトからでもできます

ハンガーゼロサポーターを大募集中!!

現在までに 42115口

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。 毎月 () 口 (1口 1,000円)
- ☐ チャイルド・サポーター(世界里親会) になりたいので説明書(申込書)を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。 毎月 () 口 (1口 1,000円)
- ☐ JIFHサポーターとして協力します。 毎月 () 口 (1口 500円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ 氏名: 男・女

〒

フリガナ 住所:

(電話)

▼申込日: 年 月 日▼NL 315号

FAX・072-920-2155

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構



Webサイトアドレス http://www.jifh.org/
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック https://www.facebook.com/hungerzero

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

- 郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
- 他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ



かざして募金

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
東京 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
東北 〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2階 E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651
愛知 〒460-0012 名古屋市中区千代田 2-19-16 千代田ビル 3F
TEL (052)265-7101 FAX (052)265-7132
広島 〒730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037
沖縄 〒900-0033 那覇市久米 2-25-8 メゾン久米 202号
TEL (098)943-9215 FAX (098)943-9216
USA Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa
8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605
TEL (510)568-4939 FAX (510)293-0940

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするため、ひばり障害者作業所(八尾市)・生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業の協力をして下さっています。

「かざして募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル(株)経由となります。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

★Tポイントを利用して「南スーダン・マンブイ小学校給食支援」ができます。現在までに243323ポイント(円)のご協力(2399件)がありました。募金はTポイント募金で検索



チャイルドサポーター報告 バングラデシュ マチュパラ地区

国際飢餓対策機構（FH）は2012年からこの地区に関わり、2016年夏現在1,245世帯、4,825人が様々な活動に参加しています。今は37の貯蓄グループができ、メンバーは721人になりました。メンバーは週に一度10～20タカ（15～30円）を持ち寄って、グループ共通の資産である貯蓄額を増やしていきます。このグループではFHのスタッフから保健衛生や子どもの教育、人権や女性に関する法律、そして聖書にもとづく価値観なども学びます。

またこの地域には支援に登録されている300名の子どもたちがいて、そのうち約100名がサポーターとの出会いを待っています。支援活動に参加中のサフィン・モンドル君の様子を報告します。

支援によって学校に戻ることができたサフィン君

〔家族の暮らし〕

サフィン君の父親のバドシャさんは、この地域のほとんどの人と同じように、借地で小麦、米、たまねぎを育てています。さらに他人の畑でも日雇いで仕事をして一家を支えています。母親のハジラさんは働いていません。

家はブリキと木、ブロック、セメント、砂で作られ、9×4mほどの大きさの部屋が二つあります。牛小屋やバナナの葉で覆った台所もあり、庭にトイレも作っています。飲み水は共同井戸から運びます。

〔家計〕

バドシャさんが育てた野菜を市場で売り、そのお金で米や食材を買って食べていますが、父親の

働きだけでは全ての必要を満たすことができず、家族は常に貧困と闘っています。学校で必要な教科書や制服を買えないことがしばしばで、サフィン君は学校に行けなくなっていました。

〔FHの活動〕

スタッフはサフィン君の母親ハジラさんを貯蓄グループに誘いました。ハジラさんは貯蓄グループからお金を借りて、夫の農業のために借地をすることができました。

毎日学校で勉強に励む

支援を受け始めたサフィン君は毎日学校に行っています。FHスタッフがサフィン君の勉強を手伝ったり子どもクラブに誘ったり



したので、サフィン君はそこで絵や工作を楽しんでいます。また衛生知識や子どもの権利、規律そして価値観についても学んでいます。

スタッフは家庭訪問をして子どもたちと定期的に会い、健康状態や通学状況を把握するように努めています。また子どもたちはクリスマス会、健康診断、世界里親会の日のお祝いに参加し、さまざまなプレゼントを受け取っています。

**バングラデシュでは
約100人の子どもたちが
あなたのご支援を
待っています !!!**

お申し込みは、JIFH公式ホームページから。[チャイルドサポーター]で検索



西南学院大学フィリピン・ワークキャンプ

2016年8月13日～23日、西南学院大学法学部の学生13名と引率ヘルプ1名と共にFHフィリピン（国際飢餓対策機構フィリピン）の活動地、ナボタス市のタンザ地域を訪問しました。ここはマニラの空港から車で約2時間の所にあり住民の多くが漁師ですが、漁の舟やボートを持たず、安い賃金で雇われています（1日約200円）。また天候が悪いと収入がさらに少なくなります。この地域で、FHフィリピンは600人の子どもを対象にチャイルドサポートプログラムを実施しています。サポーターの支援によっ

て子どもたちが毎日学校に行けるだけでなく、子どもたちを取り巻く環境の改善を地域のリーダーや親たちも取り組んでいます。

今回この地域で私たちは、学校設備の修復や地域のお母さんが子どもたちに怪我をした時の初期治療の方法を教える手伝い【⑤写真】をさせていただきました。地域住民が支援を受けるだけでなく主体的に活動に関わって子どもたちをケアしておられる姿が印象的でした。

参加した学生たちが日本と異なる環境に戸惑いながらも、様々なことを学んだ、その感想の一部を紹介いたします。

（報告・吉田知基）



子どもや家族との交流から 気づかされ自ら学んだこと

少女との出会いに感銘

私はフィリピンの地域社会としての豊かさを強く感じました。近隣の人との関わりが密接で常に相手を思いやり、困った事があれば協力して一緒に解決しようとする姿がとても印象的でした。私はこれまで特



に夢や目標もなく突然と日々を過ごしていましたが、ナボタスでの1人の少女との出会いに深い感銘を受け、「全ての人に生き方の選択肢が与えられる世界だったらな」と思うようになりました。今私はそのために貢献できる大人になるために尽力しようと思っています。（大隈あゆみ）

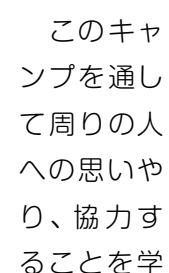
伝えられないもどかしさ

私はフィリピンに来て早々、40度を超える熱を出してしまいました。病院では手続きもFHスタッフがしてくださり、また現地のお母さんたちに看病していただき非常にありがたかったです。感謝の気持ちを一生懸命に伝



えようとしたのですが、私の英語力では限界がありました。もっと伝えたいこと、知りたいことがたくさんあるのにそれができなかったことをとても悔やんでいます。なんとでも英語は最低限話せるように努力していきたいです。（寺町和馬）

思いやりと協力



このキャンプを通して周りの人への思いやり、協力することを学びました。ホームステイでは、厳しい環境の中、家族も近所の人たちも温かく迎えてくださいました。キャンプ中の活動では、全部やってあげるのはではなく、できないことを補い合い協力することが大切だと学びました。日本に帰ってからは、いろ

いろなことに感謝できるようになりました。（中田優美）

自分の無力さを痛感

私は海外を見てみたいという軽い気持ちで応募しました。しかしマニラからナボタスに行くまでの間に、路上で暮らす人々や交通マナー、浸水している現地を見て、生活の違いや過酷さに驚き、軽い気持ちは吹き飛びました。ナボタスでは、ある少女の手に傷があったのですが目の前の子に何もしてあげられない自分の無力さに失望しました。今回多くの事を学べましたが、一番感じたのは無力さです。私はこの経験を忘れないよう心がけ、自分が困っている人の力になれることを増やそうと思います。（山根大輝）



8月15日～24日の10日間、自分自身の宝物を見つけ、現地の人の宝物を教えてもらうのを目標に20代から60代の方々9名とJIFHスタッフ2名が、アフリカのウガンダ共和国を訪問しました。



2016 サマーキャンプ in ウガンダ 子どもたちの大切な宝物は…



1 日目はウガンダに到着後、首都カンパラにある飢餓対策機構ウガンダ(FHU)の事務所を訪問し、現地スタッフと交流。2日目にはフィールドのナムトゥンバへ。カンパラから約4時間、夕方FHUナムトゥンバの事務所に着きました。

ここカイティは、外国人が立ち寄ることはほとんどない小さな村です。どのNGOも入っていないので、FHUはここを活動地として選んだと話してくれました。どこに行っても、『ムズング!』(Muzunguスワヒリ語で「白人」の意味、外国人という意味もあるらしい)と声をかけられました。子どもたちは写真を撮って、と駆け寄ってきます。大人は私たちをダンスや歓迎のスピーチで迎えてくださいました。

滞在中は、フィールドで行われている活動の視察と地元の方々との交流が中心。日本のサポーターが支援して下



さっている里子たちの5家庭を訪問させていただきました。どの家庭でも支援への感謝と訪問してくれたお礼にと、鶏、落花生、米、カボチャ、手作りの鍋敷きなどをお土産にと差し出されました。ここで子どもを学校に通わせることは、経済面でも労働力という面でも大きな犠牲を意味します。そんな子どもたちをサポーターが支援してくれるお蔭で、学校で勉強ができて医療サポートも受けられ、子どもだけでなくコミュニティ全体が利益を受けている。そのことに感謝の気持ちを表してくださったのでしょう。私たちはそんなウガンダの方々の気持ちを感じて、繋がることの大切さを教えられました。日本とウガンダは、約11,500キロも離れていますが、サポーターと里子そして地域の人たちが、強い絆で繋がっているのです。

JIFH報告：伊東綾



参加者の体験談

鶴若仰太さん 満ち足りるを知る

10日間という短い期間の中で現地の多くの方々との出会い、子どもたちと触れ合い、どこに行っても温かく我々を迎え入れてくれたことに感激した。短くも濃かったこのキャンプの目的である“宝探し”をする中で学んだことが、「満ち足りるを知る」ということである。

FHウガンダが関わっているコミュニティを訪問し、そこで行われている貯蓄プロジェクトについて話を伺った。このコミュニティではそれぞれの家庭が経済的に困難な中で医療や子どもたちの学校や、農作などの問題に向き合っていた中、昨年の12月に始まった貯蓄プロジェクトによって、コミュニティ全体で対処できるよう改善がなされ始めている。

我々日本人の目から相対的に見れば、物質的な豊かさは乏しい。しかし帰ろうとする我々に自分たちで育てた野菜を喜びをもって差し出してくださった村の人たちは、自分たちの持っているものを自覚した誇りを持っているように感じ



ナムトゥンバで出会った子どもたち

た。聖書に、貪欲はいつか自分を滅ぼすと記されている。日本に住む私は、よく考えれば必要でないものにもその欲望ゆえにお金をかけようとする。我々は神から与えられた我々に必要なものに目を留めなければいけない。

大野満愛さん 当たり前ができていない

第一にウガンダの子どもたちの輝いた目がすごく印象的で、日本からしたら不便なところだけどみんな前向きに生きていて、すごく感動したし励まされました。

「宝物はなに?」って聞くと「勉強」と言う子が多くて、勉強できることに感謝する姿にも感動しました。里子の家では私たちに「サポートをありがとう」ってすごく感謝されました。だけど私たち工業先進国の方がサポートするのが当たり前だと思いました。贅沢な生活ができる所に生まれたのだから、困っている地域や国を助けるのは当たり前なのに、なんでできないんだろうと思いました。私も家族でサポーターをしていましたが、ウガンダに来て子どもたちをすごく身近に感



サポーターさんからの写真を手に



サポーターの大野さんは「この体験を伝えたい」と

じ、もっとサポートが必要だと改めて感じました。私が目で見て感じたことをもっと周りの人に伝えていく事で、少しでもサポートへのつながりになればいいと思います。

鈴木とし江さん アフリカの友にエール

「むかしおとめ」の憧憬の大地、赤いアフリカはトイレットペーパー持参の手動



地元のお母さんからかご作りを教わる

式水洗トイレの旅でもありました。ウガンダは千m級の高地の国であり、火山も地震もない最も古い安定した地殻の上にあるためか、連なる山々は穏やかな姿を見せてくれています。住む人の気質も自然と同じまろやかです。幼子のスカートの下はむき出しのお尻、校庭を走り回る裸足の黒い足は、土ぼこりで灰色ゾーン。

アフリカ大陸はかつては強国の植民地、現在は部族間の利権争い等、多くの問題を抱えながらも、「アフリカの友よ。不屈の魂をもて」と日本の地よりおばさんはエールを送ります。



手芸を教えながら子どもたちと接する鈴木さん



JIFH支援者の募金により教室が完成したカサレ小学校も訪問、生徒や保護者、学校、地域の人々がとても喜んでくださいました

世界食料デー

沖縄大会の取り組み

沖縄で開催されてきた「世界食料デー大会」は今年30周年を迎えます。比嘉幹房実行委員長に経緯を田村総主事が伺いました。



開催30年、これからも沖縄の「ちむぐる」を世界へ

田村：まずは30年もの間、食料デー大会を開催し続けることのできた原動力について伺いたいのですが

比嘉：ひとつには多くの協力者があったということでしょうか。例えば外務省、国連、沖縄県や30



余りの後援団体の方々の協力が30年続けられた原動力だと思いますね。また、市町村、企業、教会、牧師や信徒の協力も大きかったと思います。

もしそのような回りの方々の色々な面からの支援がなければ、お

そらく30年続けられなかったと思います。

田村：宮古・八重山・久米島を含めて6ヵ所で行っているのは、全県的で非常にユニークですが、広い形での協力があったということですね。県庁まで関わっているのは他にはないですね

比嘉：初め私たちがこの働きをするときにまず、県庁に話をもっていったんですよ。そしたらね、「本来なら私たちがやるべきものを皆さんがやってくださるのですか」と言われて、県側からも非常に感謝されました。県側の協力に対する意識の大きさも私たちがやり続けることができた大きな力だったと思います。

田村：募金においても相当バックアップをしてくれたということですね

比嘉：近年はさまざまな世界的、国内の災害なども増えてきて、県の力も分散されているということは否めないと思います。

田村：これまで大切にしてくられた基本姿勢やご苦勞をお聞かせください

比嘉：一日に何万人もの子どもたちが食べるものがなく死んでいくということは、この働きに関わってから知るようになりました。



私たちの意識の土台にあるのは、私たちもかつて戦争を体験し、戦後米国からの救援物資を受けて生き延びてきたということです。沖縄の方言でいうと、「ちむぐるさ」（心苦しさ）という情ですね、それが基本的な考えとなっていると思います。

苦勞としては、長いことやっているとマンネリ化してくるので、どうもっと沢山の人を巻き込んでいくかが課題ですね。先日の実行委員会でも、どうして支援金が減ってきているかをきちんと検証し対策をしていきたいと意見がでました。

田村：沖縄で食料デー大会を開催しつづけることの意義は

比嘉：これからも続けていくことの意義は、聖書に基づいた一杯の水とパン。聖書の「これらの最も小さな者の一人にしたのは私にしたのである」というビジョンに立って貧しい人に対する思いを持ち続けていかなければいけないと続けます。

ちむぐる＝肝、真心。ちむぐるさとは、心苦しい。可愛そう。



昨年の大会、今年は10月15日(土)に開催、当機構森祐理親善大使らが出演

南大阪大会の取り組み

1996年の第1回から20年目を迎えた「世界食料デー南大阪大会」は、泉大津市にある南大阪聖書教会（古林寿真子牧師：JIFH評議員）で開かれる実行委員会によって進められています。委員会

地元自治体として市民運動を強力にサポート

行政の立場から世界食料デーに関わってくださるのは？

泉大津市では子育て支援に力をいれています。その一環として、静岡県牧之原市で拡張型心筋、症の難病を発症した「はなちゃん」（今年1月生まれ）が海外で心臓移植を受けられるように支援する運動が広がっていますが、泉大津市もこれを応援することにしました。他の市の話で終わることもできます。しかし私たちが市の子育て支援事業で大切にしていることは、アクションを起こすことです。その観点に立てば、世界で食べることに困っている子どもにしろ、市の「こども食堂」（地

方自治体として全国初）に来ている子どもにしろ、助けるということと同じだと思います。企業人や政治家はよくグローバル（地球規模）という言葉の口にしますが、それは子育てにも当てはめべきものではないでしょうか。

目では見えない部分を大切に！

大会に参加・協力する市民の皆さんにどのようなことを期待されますか？

人間の目に見えるもの、道路がよくなったとか駅前に素敵なホテルができたとか生活する上でのアメニティ追求は必要なことでもあります。しかし様々な問題や課題が出てきている中で、今の社会で大切にしなければならないことは、むしろ目では見えない部分にあると感じています。それは、「思いやり」や「労わり」であり、そこから他者のためにアクションが生まれ、それがいい社会にならないし、いい街づくりにはつながらない



ロビーでは絵画の入選作品と世界の子どもたちの児童画を掲示しています

と考えています。昨年の大会では40万円をこえる募金が集まりましたが、世界の必要性を考えるとまだ少ないと感じています。ですから一人ひとりの愛の輪が広がっていくことを願っています。

今年も大会でギター片手に歌を披露していただきますね

よく気さくな市長と言われたりします。自分でもあまり政治家とは思っていません。ただ市の舵取りをまかされた以上は市民をいい方向に導けたらと思いますし、この素晴らしい食料デー大会をさらに市民主体の運動にしていければと願っています。そのためには喜んで歌も歌いますし、市としてもできるだけの応援はしていきたいと思っています。



大会実行委員長の古林氏と伊藤市長（委員の会合で）

市内の園児たちから「食」をテーマに絵画755作品が集まる



泉大津市では、今年から世界食料デー大会を市の広報紙での開催告知、市内の掲示板へのポスターの掲示などをしています。また今回、市内の保育園や幼稚園などにも「こども未来課」を通じて、食をテーマにした児童画の募集も働きかけていただき計755名もの園児が参加してくれました。この中から絵画指導者らで100作品を選定、その一部が大会前の9月26日から5日間、泉大津市役所ロビーに掲示されました。また世界食料デー大会当日は、ロビーで入選作品の展示とともに、優秀作品12点（園児12名）の表彰式が行われます。

大会に何度も出演してくださっている親善大使の上原令子さん（コスベールシンガー）と照屋京子さん（女優）



「宮中大会」にちむぐるの歌を歌った親善大使のManamiさん（歌手）

